

# Baudelaire のオクシモロン

南 直 樹\*

## はじめに

オクシモロン (l'oxymoron, l'oxymore) は、邦語では「撞着語法」あるいは「矛盾形容語法」などと訳されている修辞法のひとつである。典型的な例で言えば、ロマン派の詩人たちが好んで使用した「黒い太陽 *Soleil noir*」という表現などがそれにあたる。Baudelaire はこの修辞法を多用したわけではないが、それは Baudelaire のある深奥の心的傾向と結びついて暗示に富んだ意義ある詩句を書くことを可能にした。

Baudelaire は *Salon de 1859* の中にこう書いている。「修辞学と韻律法は恣意的に発明された圧制ではなく、精神的存在の身体組織そのものによって要請された規則の集成であることは明白である。しかも韻律法や修辞学が、独創性の判然と生じるのを決して妨げたことはなかった。その逆、すなわちそれらが独創性の孵化<sup>ふか</sup>を助けてきたという方が、無限により真実であろう」<sup>1)</sup>。また Baudelaire は « *Les Fleurs du mal* » の *Projets de préfaces* [III] に「ある名詞をそれと類似した、あるいはそれと反対のある形容詞と組み合わせることによって、あらゆる、甘美さあるいは苦さの感覚、至福あるいは恐怖の感覚を表現する可能性」<sup>2)</sup>と記しているが、類似した形容詞を組み合わせる技法はエ

---

\* 福岡大学人文学部教授

ピテット（形容法）と呼ばれ、反対の形容詞を組み合わせる技法がオクシモロンとされる。Baudelaire のオクシモロンに関しては、Léon Cellier の先駆的な研究が知られているが、その中でその本性を定義して、「この世界とは「反対ノ一致 coincidentia appositorum」の世界だ。両極化したヴィジョンのあとに、相反するものが、本当に和解しないまでも、なにか言葉で言い表わしえぬものを表現しようとするように、歩み寄る段階が続くのだ。往々にして陰と光は、相容れないどころか、反対にある神秘的要素の存在を意味しようと欲しているように見えることがある」<sup>3)</sup>と書かれている。Baudelaire はオクシモロンという修辞法に、詩篇の展開上の転換点や詩の深い意味を示唆する重要な役割を荷わせているように思われる。

アンチテーズがふたつの思想、ふたつの事物の対立を、それらを近づけることによって強調するのに対して、オクシモロンは矛盾するふたつの語の連合によって構成される。このふたつの語の組み合わせは一般に実詞と形容詞のあいだで操作される。Baudelaire はオクシモロンを構成するふたつの語のひとつに正の意味を与える。その時もう一方の語は義務的に負のコンテキストを持つ。負の負荷が実詞あるいは形容詞にかかわるに従って、そこから揺され現出されるのは世界の秩序または現実の次元である。実際、もし負の負荷が実詞にかかるならば、形容詞（その負荷は正になる）は実詞がその中に隠している否定性を小さくするであろう。反対に、もし実詞が正の極を与えられるならば、負の極の形容詞はその実詞が後光で飾られる積極性を墮落させにくるだろう。この形象のふたつのケースにおいて、オクシモロンのお蔭で Baudelaire が現実を超越するのが見られる。ひとつの実詞を負の極にそしてひとつの形容詞を正の意味に組み合わせることによって、Baudelaire は実詞の中に含まれた悲観論的な色合いを実際婉曲的に表す。Baudelaire はその時現実の障害への意味論的な勝利を獲得する。あるいは正の色合いの実詞をその役割が負の形容詞と結びつける時、彼はわれわれがその存在の可能性をア・プリオリに気づくこ

とのない新たな日の光のもとに、この実詞について所有する認識を明らかにする。それ故第一の場合、われわれは現実の破壊的な力の無化に現前しており、第二の場合われわれの現実の認識は重要な豊かさに到達する。

## I

まず最初に負の実詞と正の形容詞で構成されたオクシモロンの例をみてみよう。このジャンルのオクシモロンは「Les Fleurs du mal」のなかでもっとも多く見出されるものだが、それは Baudelaire の誌的世界がしばしば憂鬱<sup>スプリーン</sup>に浸されるだけに一層信憑性を獲得する。こうして「Les Fleurs du mal」の詩集を開く *Au Lecteur* という詩の中で、Baudelaire は否定的なコノテーションを持つふたつの実詞「remords」と「monstre」に、その極が正であるふたつの形容詞を結びつけてオクシモロンを構成しているのが見出せる。詩の最初の二節：

La sottise, l'erreur, le péché, la lésine,  
Occupent nos esprits et travaillent nos corps,  
Et nous alimentons nos aimables remords,  
4 Comme les mendiants nourrissent leur vermine.

Nos péchés sont têtus, nos repentirs sont lâches;  
Nous nous faisons payer grassement nos aveux,  
Et nous rentrons gaiement dans le chemin bourbeux,  
8 Croyant par de vils pleurs laver toutes nos taches<sup>4)</sup>.

「愚かさ、誤り、罪、吝嗇<sup>りんしょく</sup>は、われらの精神を占め、肉体を苦しめている」(v.

1-2)。「そしてわれらは、乞食たちが虱しらみをはぐくむように、われらの愛いとしい悔恨どもを養っている」(v.3-4)。この「愛しい悔恨」というオクシモロンの« aimables »とは元来は「愛されるに値する」、「可愛らしかったり愛想良かったりするから人に愛される」の意であり、阿部良雄はこの形容詞について「こと恋愛に関して、「愛想良く身をゆだねる」の意もある」<sup>5)</sup>とし、「この最後の意を汲めば、「悔恨」といってもいい加減のところであらざるものということになり」<sup>6)</sup>と述べているが、「愛しい」という形容詞は「悔恨」の負の価値を弱めて、続く第二節の人間の心の「改悛の情」の不徹底さを予告するものとなっている。「われらの罪は強情で、改悛の情はだらしない。告解をただけで、気前よく支払ったほどの気持ちになり、卑しい涙にすべての穢けがれを洗い落としたつもりになって、浮き浮きと、泥濘ぬかるみの道に舞い戻る」(v.4-8)。そして詩の最後の三節で Baudelaire は « ennui » について次のように書く。

Mais parmi les chacals, les panthères, les lices,  
Les singes, les scorpions, les vautours, les serpents,  
Les monstres gaspissants, hurlants, grognants, rampants,  
32 Dans la ménagerie infâme de nos vices,

Il en est un plus laid, plus méchant, plus immonde!  
Quoiqu'il ne pousse ni grands gestes ni grands cris,  
Il ferait volontiers de la terre un débris  
36 Et dans un bâillement avalerait le monde;

C'est l'Ennui!—l'œil chargé d'un pleur involontaire,  
Il rêve d'échafauds en fumant son houka.  
Tu le connais, lecteur, ce monstre délicat,

40 —Hypocrite lecteur, —mon semblable,—mon frère?<sup>7)</sup>!

「だが、<sup>ジャッカ</sup>金狼にもあれ、豹にもあれ、牝狼にもあれ、猿にも、<sup>さそり</sup>蠍にも、禿鷹にも、蛇にもあれ、われらの悪徳をとりあつめた穢<sup>けが</sup>らわしい動物園の、啼<sup>な</sup>き、吼<sup>ほ</sup>え、唸り、這い回る怪物どものさなかに、さらに醜<sup>よこし</sup>く、さらに邪<sup>よこし</sup>まな、さらに不浄な者が一匹いる！」(v.29-33)。動物を用いての罪や悪徳の寓意表現について、Baudelaire は 1856 年 1 月 21 日付の Alphonse Toussenel 宛の手紙の中で次のように述べている。「——そして原罪に関しても、観念に象<sup>な</sup>って作<sup>な</sup>られた形態<sup>な</sup>に関しても、私は実にしばしばこう考えてきたものです、有害で嫌悪感をもよおさせる獣たちは、恐らく、人間のもろもろの悪<sup>な</sup>しき思念<sup>な</sup>の、生命を与えられ、身体を与えられて、物質的生命へと孵化したものに他ならないのだ、と。——それ故自然の全体が原罪の性質を帯びているのです」<sup>8)</sup>。そのわれらの悪徳の怪物どもの中で「さらに醜<sup>よこし</sup>く、さらに邪魔<sup>よこし</sup>な、さらに不浄な者は大仰な身振りもせず大きな声も立てないが、進んで地球を廃墟にしてしまうことも、ひと<sup>あくび</sup>欠伸にこの世を呑みこむこともやりかねない。これこそ<sup>アンニュイ</sup>〈倦怠〉だ！——目には心ならずも涙、水煙管<sup>みずぎせる</sup>をくゆらせながら、断頭台の夢を見る」(v.34-38)。「倦怠」とは「人生に興味がもてなくなって、何もせず退屈している、永続的な状態を指す」<sup>9)</sup>が、最後に詩人は読者に「悪における連帯」を強要する。「あなたは知っている、読者よ、この繊細<sup>デリケート</sup>な怪物を、——偽善の読者よ、——私の同類、——私の兄弟よ！」(v.39-40)。「monstre」につけられた« délicat »という形容詞は、「洗練された、優美な」という意であり、また「過敏<sup>もろ</sup>な、脆い」という意でもあるが、阿部良雄は魔王<sup>サタン</sup>や倦怠との関連において、「この怪物は「すれっからした、気むずかしい、軽蔑的な」という意味で（喜ばせ満足させることがむづかしいという意味で) délicat でもある」<sup>10)</sup>と説明している。これらふたつのオクシモロンのお蔭で、Baudelaire はこれらの実詞の負の主調音を婉曲的に表現し、詩の読者に「悪における連帯」に参加させることに成功し

ている。

*Une Charogne* という詩の中で、Baudelaire は自然主義的なサディズムの刻印を受けた欲望と美（女）の唯心論的な飛翔を和解させようとしてオクシモロンを使用している。詩人と恋人はある「とても快い夏の朝」、「とある小径の曲がり角、散り敷く小石の寝床の上に穢らわしい獣の腐屍しかばね」を見出す。「淫らかな女のように、両足を宙にかかげて、身を焦がし、毒の汗を滲ませながら、投げやりに、臆面もなく、悪臭に満ちた腹を開いて曝さらしていた」（v.5-8）。「太陽はこの腐れ肉さんさんの上に燦々と照っていた、この肉をほどよく焼こうと、また、偉大な〈自然〉がまとめ上げたもののすべてを、百倍にして返そうとでもいうように」（v.9-12）。このように『創世記』三十九の思想、すなわち「人間は土から取られたものだから土に返らねばならず、塵だから塵に返らねばならぬという」、「生と死の物質的循環の場としての自然、という観念」<sup>11)</sup>（阿部良雄）をサディックな欲望をこめて表明した後、Baudelaire は次のように書く。

Et le ciel regardait la carcasse superbe

Comme une fleur s'épanouir.

La puanteur était si forte, que sur l'herbe

16 Vous crûtes vous évanouir<sup>12)</sup>.

「そして天は、壮麗な死骸が花のように咲き誇るのを眺めていた。腐臭はとても強く、草の上にあなたは気絶せぬばかりだった」（v.13-16）。« carcasse superbe » というオクシモロンは腐屍の光景によって引き起こされる恐怖を幾分か和らげる機能を果たしている。われわれはここで、その只中に恐怖が身を置いている対象から美学的な立場を引き出そうとする Baudelaire の精神の深いひとつの傾向を認めることができる。それは腐屍けがの穢れた様をさらに列挙した後、最後の三連で爆発する。

—Et pourtant vous serez semblable à cette ordure,  
 À cette horrible infection,  
 Étoile de mes yeux, soleil de ma nature,  
 40 Vous, mon ange et ma passion!

Oui! telle vous serez, ô la reine des grâces,  
 Après les derniers sacrements,  
 Quand vous irez, sous l'herbe et les floraisons grasses,  
 44 Moisir parmi les ossements.

Alors, ô ma beauté! Dites à la vermine  
 Qui vous mangera de baisers,  
 Que j'ai gardé la forme et l'essence divine  
 48 De mes amours décomposés<sup>13)</sup>!

「—だがしかし、あなたもこの汚物、このおぞましい悪臭を放つ物に似たすがたとなるだろう、わが眼の星、わが自然の太陽、わが天使にしてわが情熱なるあなたも！」(v.37-40)。「そうとも！あなたもこのようになるだろう、おお優美さの女王よ、臨終の秘蹟を受け終わって、肥え茂る草花の下へ降りてゆき、骸骨の間であなたも<sup>かび</sup>黴る時」(v.41-44)。「その時、おおわが美しきひとよ、<sup>くち</sup>接吻であなたを<sup>つげ</sup>蝕む<sup>むしば</sup>蛆虫に<sup>うじ</sup>伝えたまえ、わが崩れ果てた恋愛の、形と神聖なる本質を私は心にしかと留めたと！」(v.45-48)。こうして第四節のオクシモンで予告された唯心論的な暗示は、物質に対する、イデアそして形相の次元に位する恋愛の「形」と「神聖なる本質」の勝利という理想主義的、プラトニズム的思念に結実する。

詩篇 *Le Léthé* に見出せるオクシモロンは、受難を受けねばならなかった恋

の取り消しのできない喪失感を和らげる働きを持つ。

Viens sur mon cœur, âme cruelle et sourde,  
Tigre adoré, monstre aux airs indolents;  
Je veux longtemps plonger mes doigts tremblants  
4 Dans l'épaisseur de ta crinière lourde;

Dans tes jupons remplis de ton parfum  
Ensevelir ma tête endolorie,  
Et respirer, comme une fleur flétrie,  
8 Le doux relent de mon amour défunt<sup>14)</sup>.

「私の心臓の上に来たまえ、聞く耳もため残酷なひと、愛する虎よ、ものぐさな様子をした怪物よ。きみの重い鬘<sup>たてがみ</sup>の茂みのなかに、私の震える指を長く沈めていたい」(v.1-4)。「きみの香りに満たされた下袴<sup>ジュボン</sup>のなかに苦痛にうづく私の頭を埋め、萎れた花さながらに、死んでしまった私の恋の甘く鼻を刺す臭いを嗅いでいたい」(v.5-8)。「doux relent」は直訳すれば「甘い悪臭」であるが、Baudelaireはこの恋の快樂の本質を再征服することができないように見えるとしても、少なくともその秘密の神秘の香りを保存しようとする。そうすることによって詩人は恋人の接吻の中を流れる「レーテー」、すなわち「忘却の河」の水を飲んで過去を忘れようとするだけでなく、たとえそれが刑罰であっても恋の思い出を進んで耐えようとする。

À mon destin, désormais mon délice,  
J'obéirai comme un prédestiné;  
Martyle docile, innocent condamné,

20 Dont la ferveur attise le supplice,

Je suceraï, pour noyer ma rancœur,

Le népenthès et la bonne ciguë

Aux bouts charmants de cette gorge aiguë,

24 Qui n'a jamais emprisonné de cœur<sup>15)</sup>.

「いまや私の悦楽となった、私の運命に私は従おう、救霊を予定された人のように。その信仰の熱さが、刑罰の火を煽り立てる従順な殉教者、無実の受刑者となって」(v.17-20)。「わが胸の怨みを溺れさせるため、私は吸おう、かつて心情を閉じ込めたことのないこの尖った胸の愛らしい二つの乳首からしたたる憂い忘れの薬を、おいしい毒人参の汁を」(v.21-24)。

*Le Flacon* では、Baudelaire は最初その容器（「物質」－「ガラス」－「小箱」－「筆筒」－「香水壺」－「柩」）にまさる様々な香り（匂い）のあることを示しながら、「愛らしく陰気な、饜えた古い恋愛」の思い出に脅かされる心身の衰退を嘆く。

Voilà le souvenir enivrant qui voltige

Dans l'air troublé; les yeux ferment; le Vertige

Saisit l'âme vaincu et la pousse à deux mains

16 Vers un gouffre obscurci de miasmes humains<sup>16)</sup>;

「今こそ心酔わせる思い出は、濁らされた空気の中を舞いまわる。眼は閉じられる。〈眩暈〉は打ち負かされた魂をつかまえて、両の手で押しやる、人間の瘡癩の気に暗くなった深淵のほうへ」(v.13-16)。しかし詩の最後の四行詩に見出されるふたつのオクシモロンのお蔭で、詩人は彼の運命の幾分かイロニックな受

容を装うことを可能にする。

Ainsi, quand je serai perdu dans la mémoire  
Des hommes, dans le coin d'une sinistre armoire  
Quand on m'aura jeté, vieux flacon désolé,  
24 Décrépit, poudreux, sale, abject, visqueux, fêlé,

Je serai ton cercueil, aimable pestilence!  
Le témoin de ta force et de ta virulence,  
Cher poison préparé par les anges! liqueur  
28 Qui me ronge, ô la vie et la mort de mon cœur<sup>17)</sup>!

「そのように、私も人々の記憶の中で、不吉な箆筒の片隅に忘れられる時、老いぼれて、埃くさく、汚く、卑しむべき、ぬるぬるとして、ひび割れた、みじめな古い香水罎よろしく、打ち捨てられる時」(v.21-24)、「私はきみの<sup>ひっぎ</sup>柩となろう、愛すべき疫病よ！きみの力ときみの猛毒の証人となろう、天使たちの調合した、愛しい毒よ！私を蝕む<sup>リキユール</sup>酒精よ、おおわが心の生命にして死なるものよ！」(v.25-28)。詩人は彼の愛に応えなかった冷たい恋人を「aimable pestilence」  
« cher poison » と呼ぶことによって恋の苦い痛手を緩和しようとすると同時に、「私はきみの柩となろう」と述べることによって「詩人自身あるいはその化身としての詩作品が彼女への記憶を保管するもの（「棺桶」）として未来に機能するであろうことを約束」<sup>18)</sup>（阿部良雄）しているのである。

*L'Âme du vin* は労働者や貧しい者を慰め力づける恵みとしての葡萄酒の徳を讃えた詩であるが、Baudelaire は葡萄酒を擬人化し、それを飲む人間の胸をこの飲み物のための「やさしい墓穴」とすることによって、死を婉曲化しようとする。

« Car j'éprouve une joie immense quand je tombe  
 Dans le gosier d'un homme usé par ses travaux,  
 Et sa chaude poitrine est une douce tombe

12 Où je me plais bien mieux que dans mes froids caveaux<sup>19)</sup>.

「なぜなら、労働にくたびれた人間の喉の中へ落ちこむ時、私は量り知れぬ喜びを感じるのだし、彼の熱い胸は心地よい墓穴、私の冷たい穴倉にいるよりはるかに居心地がよい」(v.9-12)。

同様に *Le Rêve d'un curieux* においても、「douleur savoureuse」というオクシモロンの現前のお陰で、Baudelaire が祓おうとするのは死の運命である。

Connais-tu, comme moi, la douleur savoureuse,  
 Et de toi fais-tu dire : « Oh! l'homme singulier ! »  
 —J'allais mourir. C'était dans mon âme amoureuses,  
 4 Désir mêlé d'horreur, un mal particulier<sup>20)</sup>;

「知っているか君も、僕のように、味わい深い苦痛を、そして人に言われはしないか「おお変わった人だ」と？——僕は死のうとしていた。恋情にみちた魂にとって、それは恐怖の入り混じった欲望、特殊な痛みだった」(v.1-4)。J.D.Hubert はこの詩について、「愛の情景を死にかかわる用語で表す」<sup>21)</sup>と述べて、詩の曖昧性<sup>アンビギュイテ</sup>を強調している。

この負の実詞と正の形容詞の組み合わせによるオクシモロンについては、散文詩集「*Le Spleen de Paris*」の中にもふたつの例を見出すことができる。*La Chambre double* において、詩人は「一つの夢想にも似た部屋、そこに、<sup>よど</sup>澱む空気が、<sup>ぼら</sup>淡く薔薇色と青に染まっている本当に精神的な部屋」に住まっている。「魂はそこで、<sup>くん</sup>哀惜と欲望の香に薫じられた、<sup>ゆあみ</sup>怠惰の沐浴をする。——それは

何かしら、黄昏めいた、青みをおび薔薇色をおびたものだ。日蝕のあいだの、逸楽の夢」。<sup>スプリーン</sup>憂鬱の詩人 Baudelaire に与えられたこのまれな幸運の光景を前にして、彼は恐怖の混じった驚きを表す。

À quel demon bienveillant dois-je d'être ainsi entouré de mystère, de silence, de paix et de parfums? Ô béatitude! ce que nous nommons généralement la vie, même dans son expansion la plus heureuse, n'a rien de commun avec cette vie suprême dont j'ai maintenant connaissance et que je savoure minute par minute, seconde par seconde<sup>22)</sup>!

「いかなる恵み深い悪霊のおかげで、私はこうして、神秘や、沈黙や、平安や、芳香に取り囲まれているのだろうか？お浄福よ！われわれが一般に生と名づけるものは、その最も恵まれた拡張状態においてさえ、いま私の識りつつある、そして一分一分、一秒一秒味わいつつある、この至高な生と何ひとつ共通なものを持ってはいはしない！」。しかし この « démon bienveillant » で予感されていた恐れは的中する。突然「物凄い、重々しい一撃がドアに鳴り響」く。「天国めいた部屋も、偶像、夢たちの女王、偉大なルネの呼びならわした〈<sup>シルフィ</sup>空気の精〉も、こうした魔法の一切は〈妖怪〉の加えた乱暴な一撃の下に、消え失せてしまった」。そこに見出すのは「この陋屋<sup>あぼらや</sup>、永久なる倦怠<sup>すみか</sup>の棲処」である。そして「〈時間〉がふたたび姿を現した。今や〈時間〉が王者として君臨する」。「この醜い老人」(＝時)は言う、「私こそが〈生〉なのだ、耐え難く、情容赦のない〈生〉なのだ！」と。こうして詩は、時の破壊的性格の苦い認識へと帰結する。

もう一つの散文詩 *La Belle Dorothée* の中で、輝く太陽の殺人的光線の下、物理的な仕方ではほとんど無化する風景を和らげるためにオクシモロンは使われている。

Le soleil accable la ville de salumière droite et terrible; le sable est éblouissant et la mer miroite. Le monde stupéfié s'affaisse lâchement et fait la sieste, une sieste qui est une espèce de la mort savoureuse où le dormeur, à demi éveillé, goût les voluptés de son anéantissement<sup>23)</sup>.

「太陽はその真直ぐな恐るべき光でもって街を打ちひしいでいる。砂はまばゆく輝き、海はきらめく。麻痺状態に陥った世界は力なく崩れ落ち、午睡をむさぼっているが、それは眠る人が、なかば目覚めたまま、自分の消滅の逸楽を味わっているような、一種の美味な死ともいうべき午睡だ」。この « mort savoureuse » という表現は、この詩の主人公「麗しのドロテ」の輝く健康さを準備する。彼女は実は娼婦らしいのだが、「しかしながらドロテは、太陽のように強く誇らかに、涯しもない紺碧の空の下でこの時刻に生きていたばかり、光の上に輝かしく黒い斑点をつくりながら人影もない街路を進んでゆく」。彼女は「細っそりした上体」「幅広い腰」をし、明るい薔薇色の「絹の服」を着て体の線を露出し、赤い日傘をさし、「ほとんど青く見える巨大な髪の毛の重みは、華奢な頭をうしろに引いて、勝ち誇った、怠惰な風情を彼女に与えている」。「時おり海の微風が、ひらひらすり裳裾の片隅を持ち上げて、つややかで堂々とした彼女の脚を見せる。そして、ヨーロッパがその方々の美術館に閉じ込めておく大理石の女神たちの足にそっくりな彼女の足は、細かな砂の上に性格にその跡を印してゆく。というのもドロテは、讚美される喜びのほうが、奴隷の身分から解放された身の誇りよりも強いほど、途轍もなくおしゃれだからであり、自由の身でありながら靴なしで歩いているのだ」。

Elle s'avance ainsi, harmonieusement, heureuse de vivre et souriant d'un blanc sourire, comme si elle apercevait au loin dans l'espace un miroir reflétant sa démarche et sa beauté<sup>24)</sup>.

「こうして彼女は、生きる幸せに満ち、白い歯を無邪気に見せて微笑しながら、諧調ある足どりで進んでゆく、あたかも自分の歩みぶりを映す鏡が、空間の遠くに見えているかのように」。« souriant d'un blanc sourire » は直訳すれば「白い微笑をもって微笑しながら」であるが、阿部良雄はこの部分について「歯の白さという具体的な意味に、彼女自身の本性<sup>ナチュール</sup>=自然が無傷に保たれていることへの確信、すなわち何事にもかかわらず存続する始原的な無邪気さの観念を掛けたのであろう」<sup>25)</sup>と注釈している。

これら様々なオキシモロンは、現実を超越しようとする Baudelaire の志向を証<sup>あか</sup>している。Emmanuel Adatte はその点について「一般にオキシモロンは、Baudelaire が現実の障害に対して獲得する勝利をととても表象している。そして、もしこの勝利がしばしば全面的でないとしても、それはそれにもかかわらず現実の破壊的な効果を弱めるのに貢献している」<sup>26)</sup>と述べている。

## II

次に正の実詞と負の形容詞によって構成されるオキシモロンの例をみてみよう。このオキシモロンのケースは、Baudelaire 詩の中に見出すことはとても数少ない。この場合、正の実詞の表す理想的なものを負の形容詞によって打ち消し、現実を認識させるようにオキシモロンは働いているようにみえる。

我々はまずそれを *La Géante* に見出す。Baudelaire は *Salon de 1859* の中で「大きなものに対する私の度し難い偏愛」について次のように語っている。「自然においても芸術においても、私はたがいに等しい美点をもつものと仮定した場合、大きな物を、他のすべての物にまして好む、大きな動物、大きな風景、大きな船、大きな男たち、大きな女たち、大きな教会などを好むのです」<sup>27)</sup>と述べている。この詩は神話的な面からみれば「女巨人」を、Baudelaire の大きな女に対する好みの面からみれば「大女」を詩<sup>うた</sup>っていると解されるが、詩は

両方の意味を込めて書かれている。

Du temps que la Nature en sa verve puissante  
 Concevait chaque jour des enfants monstrueux,  
 J'eusse aimé vivre auprès d'une jeune géante,  
 4 Comme aux pieds d'une reine un chat voluptueux.

J'eusse aimé voir son corps fleurir avec son âme  
 Et grandir librement dans ses terribles jeux;  
 Deviner si son cœur couve une sombre flamme  
 8 Aux humides brouillards qui nagent dans ses yeux<sup>28)</sup>;

「〈自然〉が力強い奇想に溢れて、日ごとに怪物のような子供たちを身ごもっていた時代、うら若い女巨人の傍らに私は好んで暮らしたことだろう、女王の足元に逸楽をむさぼる猫のように」(v.1-4)。「私は好んで眺めただろう、彼女の肉体がその魂とともに花開き、恐ろしい戯れのうちに思いのままに成長するのを。彼女の眼に漂う潤んだ霧から判断したでもあろう、彼女の心が暗い炎を抱いているかどうかを」(v.5-8)。Baudelaire は実詞 « flamme » に負の形容詞 « sombre » を結びつけることによって、この「女巨人」の<sup>はら</sup>孕む「不健康さ」、<sup>はら</sup>「倦怠」を認識させようとしている。

Parcourir à loisir ses magnifiques formes;  
 Ramper sur le versant de ses genoux énormes,  
 11 Et parfois en été, quand les soleils malsains,

Lasse, la font s'étendre à travers la campagne,

Dormir nonchalamment à l'ombre de ses seins,  
14 Comme un hameau paisible au pied d'une montagne<sup>29)</sup>.

「そのすばらしい姿態の上を心まかせに歩きまわり、その巨大な膝の斜面を這い登り、また時として夏に、不健康な太陽の陽射しが、<sup>う</sup>倦み疲れた彼女を野に長々と寝そべらせる時、その乳房の影にのんびりと眠っただろう、山の麓<sup>ふもと</sup>のどかな村落のように」(v.9-14)。

Baudelaire は *Don Juan aux enfers* という詩の中で、オクシモロンに同じ合目的性を求めているように見える。

Quand Don Juan descendit vers l'onde souterraine  
Et lorsqu'il eut donné son obole à Charone,  
Un sombre mendiant, l'œil fier comme Antisthène,  
4 D'un bras vengeur et fort saisit chaque aviron.

Montrant leurs seins pendants et leurs robes ouvertes,  
Des femmes se tordaient sous le noir firmament,  
Et, comme un grand troupeau de victimes offertes,  
8 Derrière lui traînaient un long mugissement<sup>30)</sup>.

「ドン・ジュアンが地の底の河の方へと降りて行き、渡し守カローンに舟賃の銅貨を一枚やったかと思うと、陰気な乞食が、アンティステネスばりの傲慢な目を光らせて、復讐の思い込めた強き腕で、權を握った」(v.1-4)。「垂れ下がる乳房もあらわ、着物をはだけた女たちは、真っ黒な天空の下に身を振じらせて、供えられた生贄の大きな群れさながら、彼の背後で長い唸り声の尾をひいていた」(v.5-8)。「アンティステネス」とは犬儒学派の祖とされるギリシャの

哲学者のことであるが、ドン・ジュアンは宗教や道徳の掟から解放されたりベルタン (自由思想家、放蕩者) であり、地獄に堕ちてもなお自我の驕慢を貫き通す不信心者である。その悔い改めることを知らぬドン・ジュアンの呪われた心を予告するため、ここでは « firmament » (蒼穹) は詩的魔術のおかげで「黒く」なる。

Tout droit dans son armure, un grand homme de pierre  
 Se tenait à la barre et coupait le flot noir;  
 Mais le calme héros, courbé sur sa rapière,  
 20 Regardait le sillage et ne daignait rien voir<sup>31)</sup>.

「甲冑に身を固めてすっきりと立つ、背の高い石の男が舵を握って、黒い波を切って行った。だが落ち着きはらった英雄は、細身の剣をついて身を<sup>かが</sup>屈め、舟の航跡を見つめて、何ものにも目をくれようとしなかった」(v.17-20)。

最後に、*Les Deux Bonnes Sœurs* におけるオクシモロンの例をみてみよう。「二人の情け深い姉妹」とは〈放蕩〉と〈死〉のことであるが、ここでもこの「姉妹」が<sup>い</sup>忌まわしい存在であることを明かすためにそれは使われている。

La Débauche et la Mort sont deux aimables filles,  
 Prodiges de baisers et riches de santé,  
 Dont le flanc toujours vierge et drapé de guenilles  
 4 Sous l'éternel labeur n'a jamais enfanté<sup>32)</sup>.

「〈放蕩〉と〈死〉は愛想のいい二人の娘、惜しげもなく<sup>くちづけ</sup>接吻はふるまうし、健康ゆたかに、その腹はいつも処女のまま、<sup>ぼろ</sup>襤褸をまとして、休むことなく働くのに、かつて子を産んだことがない」(v1-4)。この「娘」たちは「娼婦」で

もあって、「家庭の仇敵であり、地獄の寵児であり、恵まれない殿上人である不吉な詩人に、墓場と淫売宿は緑の木陰にあるかつて悔恨など訪れたことのない寢床<sup>ベッット</sup>を見せてくれる」。

Et la bière et l'alcôve en blasphèmes fécondes  
Nous offrent tour à tour, comme deux bonnes sœurs,  
11 De terribles plaisirs et d'affreuses douceurs<sup>39)</sup>.

「そして棺桶と寢室が、冒瀆の言葉を撒き散らしながら、二人の情け深い姉妹のように、代る代る与えてくれる、恐ろしい快樂とぞっとするような心地よさを」(v.9-11)。v.11は〈放蕩〉と〈死〉がもたらす「快樂」と「心地よさ」は、本来的に「恐ろしい」「ぞっとする」ものであることをBaudelaireが知っていることを示している。後は詩人には、この「二人の情け深い姉妹」によっていつ埋葬されるのか尋ねることしか残っていない。

\*

以上見てきたように、Baudelaireはふたつの異なった種類のオキシモロンを駆使することによって現実を超える力を詩篇に与えることに成功しているようにみえる。前者（負の実詞と正の形容詞）は現実の障害に対する絶えざる闘いの同義語であり、否定性の部分的な破壊の探求である。後者（正の実詞と負の形容詞）はわれわれの現実の認識の豊富化を目指す。こうした語の連合の大胆さを前にして、それを読むわれわれ読者は驚きで無言のままBaudelaireの詩的手法の巧みさに感嘆するばかりである。それはまさに「深遠な修辞法」(Léon Cellier)だったのである。

## 註

使用テキスト : Baudealire : *Œuvres complètes*, p.Claude Pichois, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976, 2vols. 以下 *O.C.*, t. I , t. II と略記。

- 1) *O.C.*, t. I , p.626-627
- 2) *Ibid.*, p.183
- 3) Léon Cellier, *Parcours initiatiques*, la Baconnière, 1977, p.195
- 4) *O.C.*, t. I , p.5
- 5) 阿部良雄訳註「ボードレール全集 I」筑摩書房, p.463
- 6) *Ibid.*
- 7) *O.C.*, t. I , p.6
- 8) Baudelaire, *Correspondance*, t. I , p.337
- 9) 阿部良雄、*op.cit.*, p.546
- 10) *Ibid.*, p.464
- 11) *Ibid.*, p.502
- 12) *O.C.*, t. I , p.31
- 13) *Ibid.*, p.32
- 14) *Ibid.*, p.155
- 15) *Ibid.*, p.156
- 16) *Ibid.*, p.48
- 17) *Ibid.*
- 18) 阿部良雄、*op.cit.*, p.518
- 19) *O.C.*, t. I . p.105
- 20) *Ibid.*, p.128
- 21) J.D.Hubert, *L'Esthétique des Fleurs du mal*, Callier, 1953, p.202

- 22) *O.C.*, t. I . p.281
- 23) *Ibid.*, p.316
- 24) *Ibid.*
- 25) 阿部良雄、op.cit., p.476
- 26) Emmanuel Adatte, *Les Fleurs du mal et Le spleen de Paris, essai sur le dépassement du réel*, José Corti, 1986, p.157
- 27) *O.C.*, t. II , p.646
- 28) *O.C.*, t. I , p.22
- 29) *Ibid.*, p.23
- 30) *Ibid.*, p.19-20
- 31) *Ibid.*, p.20
- 32) *Ibid.*, p.114
- 33) *Ibid.*, p.115

### 参考文献

- Baudelaire : *Œuvres complètes*, p.Claude Pichois, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1975, 1976, 2vols.
- Baudelaire : *Les Fleurs du mal*, p.Jacques Crépet et Georges Blin, José Corti, 1942.
- Baudelaire : *Les Fleurs du mal*, p.Antoine Adam, Garniers Frères, « Classiques Garnier », 1961.
- Baudelaire : *Petits Poèmes en prose*, p.Robert Kopp, José Corti, 1969.
- Baudelaire : *Petits Poèmes en prose*, p.Henri Lemaître, Garniers Frères, « Classiques Garnier », 1962.
- Emmanuel Adatte : *Les Fleurs du mal et Le Spleen de Paris, essai sur le*

*dépassement du réel*, José Corti, 1986.

Léon Cellier : *Parcours initiatiques*, la Baconnière, 1977.

Robert Benoix Chérix : *Commentaires des "Fleurs du mal"*, Droz, 1962.

Marc Eigeldinger : *Le Soleil de la poésie*, la Baconnière, 1991.

Pierre Emmanuel : *Baudelaire, la femme et poésie*, Seuil, 1982.

René Galand : *Baudelaire, poétiques et poésie*, Nizet, 1969.

J.-D Hubert : *L'Esthétique des "Fleurs du mal"*, Callier, 1953.

Jean Prévost : *Baudelaire, essai sur l'inspiration et la création poétique*,  
Mercure de France, 1964.

Jean Pierre Richard : *Poésie et profondeur*, Seuil, 1955.

Jean Paul Sartre : *Baudelaire*, Gallimard, 1947.

阿部良雄訳註『ボードレール全集 I - VI』, 筑摩書房, 1983-1993.

多田道太郎編『悪の花評釈』, 平凡社, 1988.